

資料紹介 白華文庫蔵・小栗栖香頂「水築小相伝」について

川 邊 雄 大

はじめに

本資料は、白山市立松任図書館（石川県）白華文庫に所蔵する、松本白華旧蔵資料の一つである。

白華文庫は、本誓寺（白山市）住職をつとめた松本白華の旧蔵書を収めたもので、昭和二年（一九二七）に同寺境内に鉄筋コンクリート二階建の書庫が落成した。昭和六十三年（一九八八）に『松任本誓寺 白華文庫目録』¹が刊行され、現在は白山市立松任図書館に所蔵される。

松本白華は東本願寺（真宗大谷派）の僧侶で、天保九年（一八三八）に加賀松任の本誓寺に生まれ、本名は巖護、白華・西塘・仙露閣と号した。嘉永三年（一八五〇）に、京都で宮原節庵²に書を、海原謙蔵・劉昇³に漢学を学び、嘉永五年（一八五二）に大坂の廣瀬旭莊塾⁴（大坂咸宜園）に入門している。

明治四年（一八七一）、白華は本資料の作者である小栗栖香頂⁵や、その弟の小栗憲一⁶とともに、東京で宗名恢復（一向宗↓浄土真宗）に従事した。

その一方、東京では水築小相（当時は秋月橋門）や長梅外ら咸宜園出身者を中心に漢詩結社⁷・玉川吟社が結成され、白華

も所属した。白華はここで漢詩文による交流を行ったほか、主宰者の一人である長三洲（長梅外の子）を通じて、江藤新平との関係を構築することに成功した。

写真①および写真②は、本誓寺に所蔵される当時（明治七年（一八七四）三月十九日～九月十五日頃）撮影された玉川吟社社中の集合写真である。写真①には、白華や秋月得生軒すなわち水築が写っている。写真②には、水築は写っていないが、子の秋月新太郎や白華、香頂の弟である小栗憲一の姿が見える。⁸

白華は明治五年（一八七二）から明治十年（一八七七）まで教部省の官吏をつとめたが、この間、明治五年（一八七二）九月から約一年間に亘って新門主・大谷光瑩（現如）、石川舜台、関信三、成島柳北とともに海外視察を行っている。明治十年（一八七七）から十二年（一八七九）まで、上海別院輪番をつとめ、帰国後は本誓寺に戻り、主に地元子弟の教育にあたり、大正十五年（一九二六）に歿した。

著書に『正因弁惑論』（明治十七年）が、漢詩集に『金城繁華三十闕』（明治四年）、『西塘俚歌』（明治二十二～二十四年）、『越蓑能笠』（明治二十二年）、『白華余事』（大正二年）があるほか、歿後に洋行日記『白華航海録』（明治五・六年）や、『白華護法録』¹⁰、『白華備忘録』¹¹、『白華教部省雜纂』¹²、『露珠閣叢書』¹³、『備忘謾録』¹⁴が翻刻されている。

水築小相や小栗栖香頂は、旭荘の兄である広瀬淡窓によって豊後日田に設立された漢学塾、咸宜園の門下生であり、旭荘塾出身の白華とは同門にあたる。

前述の通り、白華は幕末期に大坂の旭荘に入門し、長三洲・劉石秋・柴秋邨ら咸宜園門下生と交流を深めており、こうした人脈の中で本資料を入手したものと思われる。

水築小相について

水築小相¹⁵は文化六年（一八〇九）、日向国に生まれ、姓は劉、通称は小相、字は伯起、得生軒などと号し、維新後は秋月氏を名乗った。前述の通り、咸宜園に入門し、のちに亀井昭陽に入門し、佐伯藩藩校・四教堂で教師をつとめ、維新後は葛飾県知事などをつとめた。

明治五年（一八七二）に上京し、同門の長梅外・三洲親子宅の隣に居を構え、長親子とともに玉川吟社を主宰し、明治十三年（一八八〇）に七十二歳で歿した。

写真①に写る水築は、白鬚を伸ばし手には杖を持っており、左隣に写る長梅外とともに、社中では高齢だが、維新後まもなく仕官し、梅外とともに玉川吟社を設立するなど、古参の門下生として咸宜園一門のなかで影響力を持っていたのであった。子供の秋月新太郎（名は士新、号は必山）は咸宜園で学び、維新後は兵部省・陸軍・内務省に出仕し、のちに貴族院議員をつとめた。

水築小相の著作には、漢詩集『橘門韻語』（明治十六年）などがあり、彼に関する伝記も複数あるが、本資料は白華文庫以外に所蔵が確認されず、従来知られていない水築に関する逸話などが記されており、彼の人となりをうかがうことができる。よって本資料の重要性に鑑みて、このたび翻刻を行うこととした。

凡例

- 一、翻刻にあたって、漢字表記については原則として現在通行の印刷字体を用い、仮名遣いについては原文に従った。
- 一、本文中の句読点は、原則として原文に従った。
- 一、判読不能の箇所は□で表記した。

一、丁数等については、(一表)のように、()内に漢数字と表・裏を用いて丁数と表裏を標記した。

翻刻

表紙 〔※朱筆にて 仙霞明珠〕／水築小相伝

大解院ノ命ニ依テ水築小相ノ事ヲ記スル

水築小相ハ豊後佐伯ノ人ナリ。自ラ曇華ト号シ、又鈍化ト号シ、又得生軒ト号ス。続宜園百家詩ノ中ニ姓名ヲ記メアリ。¹⁶年少ニメ英才不群ナリ。廣瀬淡窓ノ門ニ入り、¹⁷恒藤頼母、¹⁸廣瀬謙吉、¹⁹劉石舟ト名ヲ齊ス。頼母ハ遠帆楼詩集ヲ著シ、謙吉ハ梅墩詩抄ヲ著シ、石舟ハ緑芋村莊詩鈔ヲ著シ、共ニ世ニ行ル。小相ハ詩文未タ世ニ出スト雖モ、其学力才徳ヲ考ルニ、三子ノ上ニ出タリ。当時ハ佐伯侯ニ事ヘテ、頭識ニ処シ、外学校教校ヲ興シ、内枢要ノ

(一表

機密ニ関スル、淡窓已後、鬱然タル大儒ナリ。「淡窓ノ門ニアル時、至貧ニメ自ラ活スルヲアタハス。豆腐ヲ販テ、豆腐ニ街ノ間ニ奔走シ、小利ヲ得テ学資ニ充ツ。遂ニ薙髮メ乞鉢ス。市人其真沙門ニ非ルヲ察メ、試ニ延テ経ヲ念セシム。小相佛前ニ於テ、蒙求ノ標題ヲ誦シ、去ル。市人之ヲ知テ、其嚙颯ノ外衣ニ、蒙求標題御札ト認メタリト申スヲナリ。」学已ニ成リ、佐伯侯拔テ左右ニ朝夕セシム。事ニ儒ニ従ヒ、内典ノ心ナキナリ。其家真宗ニ係ル。母深ク佛ニ帰シ、小相ヲ風スレトモ、従ハス。已ニメ母

(二裏

病ニ卧シ、衰老、医スヘカラス。小相力ヲ尽メ看待ス。母自ラ治スヘカラサルヲ知テ、小相ヲ枕上ニ召シ、涙ヲ垂テ云ク、汝

ハ書ヲ讀メトモ、母ニ孝スルヲ知ラス、自今以後、我意ニ隨ンヤ否ヤ。答曰、萬死豈命ニ隨ハサランヤ。母云、然ハ我往ク
処ニ至ンヤ。答曰、何ノ処ナリヤ。母云、西方ニ佛土アリ、安養ト名ク。云ク、如何セハ往クヘキヤ。母云ク、御文ヲ持来
リ、枕上ニ一読スヘシ。小相之ニ隨フ。母大ニ喜ヒ、云ク、今ニメ我遺憾ナシ。抑今一生ノ孝ハ、唯衣服飲食ノ具ニ止ル。後
生得脱ノ孝ハ、千世不

(二表)

朽ノ大孝ナリ。御文ノ鑄鑄ニ隨ヒ、足其実地ヲ踏ヲ得ハ、予ニ從テ必ス蓮華藏界ニ往生スヘシト。乘彼願力定得往生ノ要義
ヲ述ヘ、訣ヲ告テ瞑目ス。小相大ニ驚キ、爾後御文ヲ朝夕シ、遂ニ決得ノ思ニ住スルヲ得タリ。メテタキ「ニ非スヤ。」公
ヨリ退食メ、餘力アレハ、必ス稱念ノ声夜ニ徹メ輟サルナリ。武人儒生之ヲ嘲レトモ、巍然トメ傾カス、之ヲ視ルヲ果羸ト螟
蛉トノ如クス。詩ニ絶ヲ作テ、佛前ニ於テ之ヲ誦ス。十一月廿七日ノ作モ、此信海ヨリ流露スルヲト見ヘタリ。甘露集一卷ヲ

(二裏)

製ス。蓋シ佐伯ノ俗、観音ヲ信ス。依テ経論及伝史ノ上ヨリ提要メ、脇士ヲ信センヨリハ、直ニ本地本佛ヲ仰クヘシト、提示
スルモノナリ。他日一篇ヲ写メ尊覧ニ入ルヘシ。」香頂、一昨年、彼地ノ風土ヲ問、吏人僧伽、共ニ談スヘキナシ。小相一人
交ルヘキナリ。之下一酌スルニ、頗ル雄偉恢廓ノ度量アリ。世儒ノ偏狭憊薄ナルモノト、同日ニ非ルナリ。香頂云ク、小子大
志業アリ。事成ハ公ニ序ヲ挖セン。我浄土真宗ノ学、源平ノ間ニ鬱興メ、徳川家ニ至テ大ニ備レリ。惠空惠然已来、八宗十宗
ノ学、我高倉

(三表)

一講堂ニ集リ、英才偉器、星布森列ス。香月院易行院ニ至テ、一宗ノ精要、至ラサル処ナシ。然ニ未タ三経七祖ノ正本上木セ
ス、実ニ一大闕典ナリ。三帖和讃ハ香月院ノ校本アリ。教行信證ハ華光院ノ会本アリ。御仮名聖教ハ香樹院ノ校本アリ。此外
顯深義記、読易行品等、千古不刊ノ典刑ナリ。唯三経七祖ナキナリ。依テ精正ノ訓点ヲ施シ、本利不朽ノ大本ト致シタシ。三

経七祖ノ釈モ、先輩苦心ノ要義、家々ノ講録、具ラサルハナシ。之ヲ総括メ、同ラステ異ヲ揚ケ、要ヲ鳩メ煩ヲ芟リ、部ヲ

(三裏)

分チ類ヲ定メ、数百門ノ正義ヲ研覈刪定シ、天台ノ二百題ノ如ク、真言ノ宗義決撰ノ如ク、法相ノ同学抄ノ如キモノヲ大成致シタシ。此ノ久テ積サレハ功ヲナシカタシ。跛斃ノ山ニ登カ如ク、偃鼠ノ河ニ飲カ如クナレトモ、寸歩已スンハ、遂ニ千里ヲ致ス。一塵ステサレハ、遂ニ十仞ニ及フヘシ。少子此事若成ハ、公為ニ之ニ冠セヨ。小相云ク、此事急速ニ筆ヲ立ツヘシ。壮ニメ之ヲ企サレハ、老ニ至テ益ナキナリ。老大初テ謀ルトモ、精力及サルナリ。若事成ハ、少子豈之ヲ序セサランヤ。モシ少子死セ

(四表)

ハ、豊前佛山堂ニ托スヘシ。少子ノ朋ナリ。香頂云ク、佛山、人トナリ如何。其詩ヲ見レトモ、未タ其人ヲ知ラス。云ク、佛山母ニ孝ニメ佛ヲ信ス。他儒或ハ之ヲ嘲ルトキハ、礼法ヲ引テ之ヲ答フ。其言ニ、我母死メ西方ニアリ。予彼ニ往テ孝セント思ナリ。又宗ヲ定メ邪正ヲ判スルコトハ、東照宮ノ公範ナリ。公範ニ随フニ何ノ失カアラン。我父、佛ヲ以テ我家ノ主トス。主ヲ敬スルニ亦何ノ失アランヤ。孝ナク忠ナク敬ナクンハ、何ヲ以テ家ヲ治メン、何ヲ以テ国ヲ齊ンヤ。天下互ニ争ヒ互ニ奪ニ至ルヘシ

(四裏)

ト。温厚ノ長者ニメ、獲信ノ金剛身ト云ヘシ。君事成テ予世ニ在ラスンハ、必ス彼ニ托セヨ。又云ク、少子儒学ノ餘弊アリテ、大経成就ノ文ニ大疑□(※竇か)アリ。公ニ一決ヲ乞フ。至心回向ノ文、至心ニ回向シ玉ヘリトハヨミカタシ。行者ノ能信ト見ヘタリ。上ノ文ニ、信心歡喜乃至一念トアレハ、一念ノ至心回向ト見タリ。又下ノ文ニ願生彼国トアレハ、至心回向メ願生彼国スル、能信ノ相ナルコト明ナリ。強テ祖誦ニ從ント欲スレトモ、一句ヲ別見メ、法ニ属スルコト不能ナリ。コノコト、往生ノ障導

トナランヤ否ヤ。香頂云ク、此ノ至心回向ノ文ヲ以テ、佛力他力ヲ顯ス、我宗ノ美談ニメ、成上起下ノ要論ナレトモ、公コレカ為ニ干格セハ、公カ為ニ且ク此文ヲ以テ能信トセン。至心ハ本願ノ至心ナリ。觀經ノ至誠心ナリ。回向ハ觀經ノ發願回向ナリ。行者ノ至心ヲ以テ弥陀ニフリムク心ナリ。是カ即弥陀ヨリ至心回向ニアツカル処ナリト示スニ、大ニ喜ヒ、云ク、初テ安堵スルヲ得タリト。彼ハ実ニ三世ヲ徹見メ、利実ヲ知ルノ偉丈夫ナリ。廣瀨淡窓モ、初ハ佛ヲ美スレトモ、姓ヲ賜ヒ

(五裏)

刀ヲ帶ルノ後ハ、排法ノ詩往々アリ。旭莊ハ口ヲ極テ嘲ル。石秋²¹モ知ラスメ妄ニ排ス。其餘滿天下ノ腐儒狂狷、我法ヲ見ルヲ、仇ノ如ク、賊ノ如ク、茶毒ノ如ク、蝮蠍河伯ノ如ク、至ラサル処ナシ。現今書肆ニ列スルモノ、十二八九ハ排佛ノ書ナリ。輓近殊ニ甚シ。聖德皇ヲ嘲ルアリ、東照宮ヲ輕スルアリ、我法ヲ以テ西洋祇教ト源ヲ同スルナリナトスルアリ。痛哭長大息スヘキヲナリ。小相ノ如キハ、廣ク古今ノ興敗ニ通シ、詩若干卷、文若干卷、未タ木ニ上ラスト雖モ、宇間ノ弊ニ陥ラス

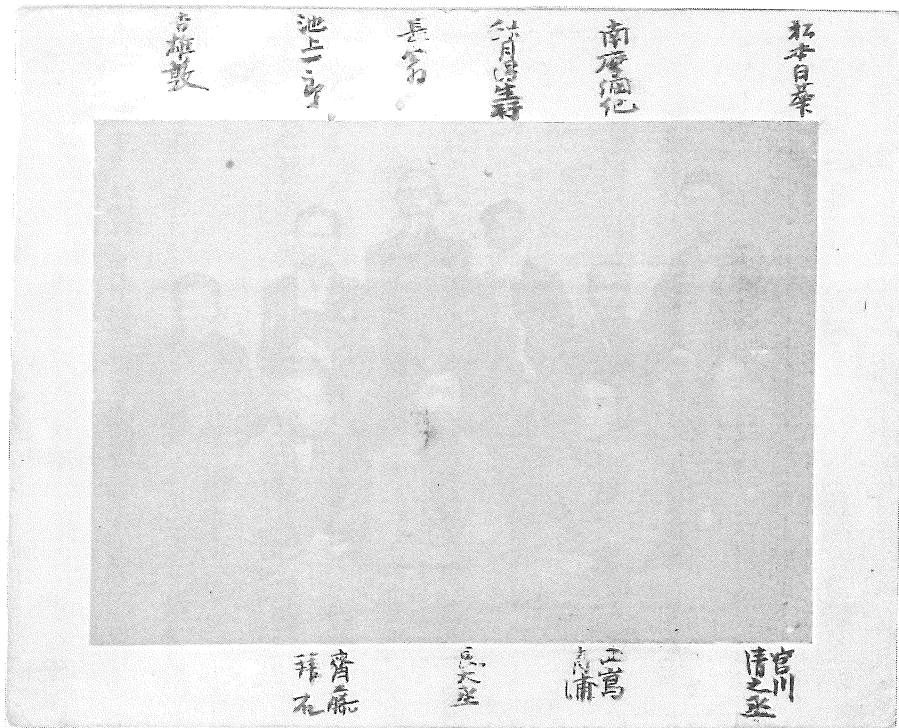
(六裏)

超然トメ居易宋元ノ域ニ処スルヲ、芙蓉ノ秋水ニ卓立スル如ク、芝蘭ノ叢棘ニ帶映スル如シ。豈一大通儒ト云サルヘケンヤ。今年五十八九歳ト見ヘタリ。帆足廣瀨ニ老ノ後、九州ノ儒者及フモナシ。上來私ノ見聞スル処ヲ以テ、小相ノ事ヲ記スルヲ如件。

慶應二年丙寅秋九月十五日

豊後香頂誌

(六裏)



写真① 玉川吟社集合写真（10名）

上段右より、松本白華・南摩綱紀・秋月得生軒（水築小相）・長翁（長梅外）・池上一郎・吉雄敦。
下段右より、宮川清之丞・西寫青浦・長大丞（長三洲）・斎藤拝石。



写真② 玉川吟社集合写真（16名）

下段右より、圀南竹富先生・梅外長先生・拝石斎藤先生・香坂雲山先生。
中段右より、堤静斎君・遠田証庵君・長古雪君・長三洲君・竹陽石井君・小栗元園君。
上段右より、広瀬雪空君・青浦西嶋君・遼青君・秋月士新（新太郎）君・竹中煮雪君・白華在隠。

大解院師ノ命ニ依テ水築小相ノ事ヲ記ス
水築小相ハ豊後佐伯ノ人ナリ自ラ墨華ト號シ
又鈍化ト號シ又得生軒ト號ス續宜園百家詩ノ
中ニ姓名ヲ記メアリ年少ニメ英才不群ナリ廣
瀬淡窓ノ門ニ入り恒遠頼母廣瀬謙吉劉石舟ト
名ヲ齊ス頼母ハ遠帆樓詩集ヲ著シ謙吉ハ梅墩
詩抄ヲ著シ石舟ハ綠茅村莊詩鈔ヲ著シ共ニ世ニ
行ル小相ハ詩文未タ世ニ出スト蚤モ其學力才
徳ヲ考ルニ三子ノ上ニ出タリ當時ハ佐伯侯ニ
事一テ顯職ニ處シ外學校教授ヲ典シ内樞要ノ

超然トシノ居易妹元ノ域ニ處スルヲ芙蓉ノ秋水
ニ卓立スル如ク芝蘭ノ叢棘ニ帯映スル如シ豈
一大通儒ト云ハルヘケシヤ今年五十八九歳ト
見ヘタリ仇足廣瀨ニ先ノ後九州ノ儒者及フモ
ナレ上未私ノ見聞スル處ヲ以テ小相ノ事ヲ記
スルヲ如件

慶應二年丙寅秋九月十五日

豊後香頂誌

- 1 註 編集松任市中央図書館、漢籍指導大沼晴暉。
- 2 文化三年（一八〇六〜一八八五）生、名は龍、通称は謙三（歳）、字は士淵、節庵・潜叟・易安・易庵・栗餘・池南・栗村と号す。備後の人。頼山陽に学びのち昌平黌に学ぶ。天保十二年（一八四一）七月京都御池車屋町に塾を開く。著書に『節庵遺稿』四卷二冊がある。
- 3 劉冷窓、名は昇、通称は三郎、字は君平、号は冷窓、豊後の人、廣瀬淡窓に入門、石秋の長男。文政八年（一八二五）生。
- 4 廣瀬旭莊。名は謙、通称は謙吉、字は吉甫、旭莊・梅墩・秋村（郵）と号す。豊後日田の人。文久三年（一八六三）歿。享年五十七歳。廣瀬淡窓の弟。
- 5 小栗栖香頂（一八三一〜一九〇五）。豊後戸次・妙正寺住職。八洲または蓮泊と号す。咸宜園の三才子といわれ、弟の小栗布岳（憲一）も咸宜園出身であった。維新後、本山を東京に移転することを提唱した。明治六年（一八七三）七月渡清、北京で中国語を学ぶかたわら、日本・清国・印度で仏教三国同盟を結び、キリスト教に対抗することを説いた。翌年八月帰国。この間、布岳は香頂からの書翰を編輯して『支那開宗見込』を本山に提出し、清国布教を提言した。明治九年（一八七六）七月、再渡清し東本願寺上海別院開設に関わる（十年一月迄）。著作に『真宗教旨』・『北京護法論』・『喇嘛教治革』などがある。
- 6 小栗憲一（一八三四〜一九一五）は、元園のち布岳と号した。豊後・妙正寺に生まれ、兄の小栗栖香頂と同じく咸宜園に学ぶ。幕末維新期にかけて、長崎などで教会に諜者を潜入させるなどの対キリスト教活動に従事した。維新後は宗名回復運動（明治四年）に参加し、弾正台・監部・宮内省・教部省・大蔵省で勤務したほか、真宗京都中学校長や善教寺住職をつとめた。明治十一年（一八七八）に琉球を、明治三十一年（一八九八）に韓国を訪れている。著書に、『豊絵詩史』（明治十七年）・『真宗興隆縁起』（明治二十五年）・『小栗栖香頂略伝』（明治四十年）などがある。
- 7 玉川吟社について述べたものは以下の通りである。
神田喜一郎『日本における中国文学Ⅰ』（二支社、昭和四十年）。
玉川堂主人・齋藤彰『玉川茶亭と玉川吟社』（『書道研究』五十号、平成四年三月）。
- 8 山本佐貫『咸宜園門人たちの詩社「玉川吟社」に関する考察』（『大分県地方史』第二七九号、大分県地方史研究会、平成十二年）。
川邊雄大・町泉寿郎『松本白華と玉川吟社の人々』（『日本漢文学研究』第二号、二松学舎大学21世紀COEプログラム、平成十九年）。
本資料は、すでに「松本白華と玉川吟社の人々」（註7に掲出）などに掲載済みだが、貴重な資料であると思われるので再録した。
本誓寺蔵。翻刻を以下の資料に収める。
『加賀文化』第二号・第四号（加越能史談会）。
- 9 柏原祐泉編『真宗史料集成』第十一卷（『維新期の真宗』、同朋舎、昭和五十年）。
- 10 北川伸三『松本白華航海録（抄）』（『郷土と文化』第十五号〜十八号、松任郷土研究会編、松任市教育委員会、昭和六十三年〜平成四年）。
- 11 大谷大学国史学会、昭和初期。
- 12 大谷大学国史研究会、昭和八年。
- 13 大谷大学国史研究会、昭和九年。
- 14 常盤大定編輯『明治仏教全集』第八卷（春陽堂、昭和十年）。
- 15 『明治仏教全集』第八卷（註13に掲出）。
- 16 水築小相（秋月橋門）に関する伝記・論考は以下の通りである。
大分県教育会編『大分県偉人伝』（三省堂、明治四十年）。
- 17 千河岸貫一編『統先哲百家伝』（青木嵩山堂、明治四十三年）。
- 18 山本郁男・岩井勝正・井本真澄・宇佐見則行「日向薬事始め（その1）―秋月橋門とその業績―」（九州保健福祉大学『九州保健福祉大学研究紀要』第六号、平成十七年）。

- 16 『宜園百家詩二編』卷三（筑後柳川樺島益親士周纂評、浪華群玉堂、嘉永七年）に「劉龍 字伯起号橘門、称小相、水筑氏、日向本莊人、仕佐伯侯、○伯起少年困削、至托跡桑門、志業不屈、竟為一藩文学、淡翁每以此勉勵後進、詩亢爽有氣骨」とある。
- 17 水築は文政七年（一八二四）四月二日に咸宜園に入門している。
- 18 恒遠醒窓のこと。
- 19 廣瀬旭莊のこと。
- 20 天領日田の豆田・隅の二衝を指す。
- 21 劉石秋のこと。
- 謝辞 本稿執筆にあたり、本誓寺前住職・故松本梶丸氏、白山市立松任図書館、咸宜園教育研究センター・溝田直己氏には、資料の閲覧・撮影等に御高配を賜りました。厚く御礼申し上げます。